

二葉亭四迷と「冷雲社」

寺 横 武 夫

わが国最初の文学者集会ともいふべき第一回文学研究会が芝公園三緑亭で開かれたのは、明治二十一年九月八日のことだった。参会者の一人坪内逍遙の回想によれば、この「明治最先の文士会」には、当代一流の文学者が蟠集するところとなつてにぎわいを呈したが、なぜか、その後に至るまで「緑雨と二葉亭はとうとう會員にならずじまひであつた」(「二葉亭の事」『柿の蒂』昭八・七)という。いま緑雨のことはしばらく措くことにしよう。しかし、二葉亭四迷の不参については、彼の胸懷に關心を寄せる者の間でもまだなおこれといった理解は示されていないようである。以下、私は、そのことに少しばかりの推測を加えてみたいと思ふ。

順序として、一応、あらかじめの経緯を調べることから始めたいのだが、会の委細については必ずしも正確な伝承がない。

山田美妙の「明治文壇叢話」には、徳富蘇峰、森田思軒、朝比奈知泉が発企人となり、九月六日付で「文学篤志のもの相集つて文学会を組織しやうと思ふ」旨の手簡を發した次第が伝えられている。参会者には、美妙を含む右の四名のほか、依田百川、高橋五郎、内田遠湖、竹越三又、坪内逍遙、久米幹文、矢野龍溪の名が挙げられている(『書物往来』大四・一二、一五・一)。

また、さきに触れた逍遙文は、自身の日記に徴して正確を期しつつ、発企者としてさらに依田学海の名をも加え、美妙のいわゆる「文学会」という名称を「文学研究会」(圈点原文)とも伝えるところに特徴がある。

逍遙の筆は、二十三年一月十一日、神田万代軒で催されたこの会の、新年宴會に出席した者の談論風発ぶりを録して躍如たるものがある。逍遙日記に「前々會以來少壯連加はりしかば、此会大いに賑へり。例の通り酒は無しにて、會費は五十錢のキマリなり。」とあるのがそれである。しかし、「大ぶ酒気ありて、意氣軒昂、あちこち歩き廻り、論議豪放」の露伴や、「酒気芬々、前はだけに著流して、いちぢかり股して歩」く忍月の姿も伝えられている。こうして、学海、蘇峰、南翠、美妙、紅葉、魯庵、さらには森槐南、宮崎湖処子、中西梅花、淡島寒

月、井上通泰らが月旦の対象に選ばれている。が、同時に、「此夜、紅葉以外の文庫連は来らず。中江(兆民?)、朝比奈(知泉)、森(鷗外)、大概(文彦?)、矢野(龍溪)、小中村、落合等も来らず。(発企人の一人らしき森田思軒も?)」(カッコ内注記は日録を起した時点での逍遙自身のもの)と名を挙げられた不参者も、以前には何らかの形で参画していたことが間接的に告げられている。

さて、逍遙によれば、右の新年会はこの集会の「第三回」めに相当し、かつ同時にそれをもって「打切り」にもなったものようである。つまり、この試みは、美妙の文中に「明治廿二年四月頃の文学会」とあるのをかりに第二回集会と考ふるならば、二十一年九月の第一回、二十二年四月の第二回、二十三年一月の第三回の、各年一度ずつ招集された集会和推測することができる。

また、西鶴・近松から始まり、出席者の近作にまで及ぶ議論のありようをつぶさに鳥瞰することはできないが、逍遙流儀の、以下のような視点はこの試みの意図の一斑をしのぶすがになつてゐる。

按ふに、此文学会の抱負は、例へば、エリザ王朝に於ける人魚クラブの文士会——ベン・ジョンソンやシェークスピアやフィリップ・シドニーやウォーラー・ローリーのそれ——をも、十八世紀に於けるトルコ頭のそれをも——博士デオンソンやゴールドスミスやレーノルドやパーク、シェリダンのそれをも——凌がうといふ意気込であつたらしい(「二葉亭の事」)

さらに、「徳富さんが是非にといふお勧めですから」(逍遙)という紅葉のことはに力点をおくならば、発企人のイニシヤティブは蘇峰に握られていたらしいことも考えられぬではない。

それはともかく、大略以上の次第で、当代の主要な文人が集結したこの席に、最後まで加わらなかつた二葉亭の存在はたしかに異色といわなければならぬ。むろん、『浮雲』第一(明二〇・六)・第二(明二一・二)篇を逍遙名義で上梓した白面郎とはいへ、蘇峰の『国民之友』へもわずか一月前に「あひゞき」

(明二・七・六、八・三)を訳載し終ったばかりの二葉亭に招請の声のかからなかつたいわれはありえない。はたせるかな、二葉亭の日記には、参加拒否の一条が確かに記されているではないか。

徳富氏外二名の名前にて芝公園三緑亭にて文学研究会を催すゆゑ出席有りたしと申越されたり、されと思ふよし有りてことほりたり、会は去る土曜日に開かれたりし(「くち葉集 ひとかごめ」)

これは、第一回集会への不参を意味する記事だが、なかなか意識的な、あるいはむしろ挑戦的とさえ映じかねない拒否である。

さて、二葉亭のいう「思ふよし」には、一体どう思いが含有されていたか。それについて特別徴すべき資料をもたないかぎり、当面は、氣ままな解釈の散歩に筆をゆだねてゆく以外方途はない。

例えば、こういうことはありえなかつたか。二葉亭に、第一回文学研究会からの招待状が届いたのは二十一年九月月上旬だった。しかし、その後、彼が居室にしていた神田猿樂町の家の土蔵部屋の机上には、実はそれとは別種の、もう一つの文学研究会から来た招待状も置かれていたのではなかつたか。いや、正式な書状などは到達していなかつたかも知れない。もともと、もう一つの会とはその書齋の中でのみ成立しうる性質のものであり、端的にいえばその書齋の主の脳中でだけ仮構されていた可能性がつかいからである。

先頃試みたる文学研(ア)究会(イ)の初度の会合は我ながら手際に候はずや これによりておもへば走書の編輯はまだはやし 今のうちには小説をかき覚ゆるよりに筆をならす方そ専一なるべき よりて某おもひ候はいさゝか暇のいることにハあれど(「落葉のはきよせ 二籠め」)

遠い先では「小説をかき覚ゆる」念願をもちつつ、しかし目下は「筆をならす」ことのみに専心しようとする「文学研(ア)究会(イ)」——これが、これから粗描してみようとする、二葉亭にとつてのもう一つの会の一端である。そして、この、わが脳中で開催すべき架空の研究会のことにかまけるあまり、彼は、蘇峰を中心とする現実の「文学研究会」への参加など等閑に符さざるをえなかつたのではなかつたか。

○氣の「鬱(ア)」いらたちたる時は外出せバすこしは紛るゝ方もあるべしとはお

もへども、故意と引籠りて求めて煩悶する(「こと多し」)か知りて心地よきやうに覚えるもの也(「落葉のはきよせ 二籠め」)

○書肆某来りて四方四方の物語す(中略) 若し心にまかせたる世ならましかバ彼等如き輩は謝して明窓淨几の下に静に書を読(「まん」)む可きを(右同)

○終日一室に密閉しをりて(「一事に拮据」)心に好まぬ事に強ひて拮据しをれハ遂に疲労するかうへに一種の不快(「の氣持」)を感じるに至るへし 此不快の感に心の浸されたるときは(「大抵」)常に好める所、樂める所も甚だ興味なきものゝ如くなりて総ておもふ所消極的となるへし 此時に当りてハ人を賞むるよりハ寧ろ人を非る傾向を生ずるものなり(「落葉のはきよせ 三籠め」)任意に引きだしたところは、すべて「浮雲」中絶寸前の、かなり異常な心理を語つた部分である。時も、招待状の来た時点を一、二年下っている。ただ、「故意と引籠りて求めて煩悶する」といった彼固有の性向を、この中から引きだしてみることが付会にすぎようか。

ところで、ここに想定しようとする「研(ア)究会(イ)」が、実際にもたれたという形跡はむろんないのである。が、だからといって、それが架空に構想されたことを否むものでもない。むしろ、そのように推測させるにたるだけの痕跡が、わずかながらも、この時期の魂の軌跡を書きつらねていた日録中に散見するのである。すなわち、明治二十二年一月初頭から同年八月ごろまでの手記「落葉のはきよせ 二籠め」がその資料であり、その欠を補うものとして、二十一年八月七日以降の「くち葉集 ひとかごめ」がある。時に、間もなく中絶する「浮雲」第三篇(明二・七・八)の執筆と重なる時点である。

さて、この架空の組織は、「文学研(ア)究会(イ)」とはいへ、「文学」以前の、文章修練にかける比重の大きいところがその最大の特徴である。

「文学研(ア)究会(イ)」が、文章修練を重視しなければならなかつた第一の理由は、むしろ「浮雲」第三篇を書きついだゆこうとしていた動きと直結するだろう。「浮雲」第一・二篇を上梓したのちの著者にとつて、おそらく最大の関心事は、この小説の続きを、いかなる文章で、いかに展開させようかということにあつたはずである。第三篇の構想や執筆の期間と、「ひとかごめ」および「二籠め」のそれが重なっているのも偶然ではない。しかも、その「ひとかごめ」や「二籠め」の前半までの世界が、文章修練のためのフラグメントや文章論の記事によって占められているのは何より有力な証拠を物語っているだろう。文章修練を目標にかかげた「研(ア)究会(イ)」の成立するゆえんである。

さらに一つ、それらの背後で、この「研窮会」を存立させるための有力な発想源として、彼の若き日に私淑した中国の文人・魏叔子（一六二四—一六八〇）の力がそのしこみの役として働きはしなかったか。「走書の編輯はまだはやし」「いさゝか暇のいることにハあれど」「今のうちには小説をかき覚ゆるよりは筆をならす方を専一なるべき——こうしたストイシズムには、おそらく、魏叔子の文言が影をおとしているに相違ない。

文飾を嫌い、「積理」「鍊識」による心の錬磨を強調する魏叔子は、例えば次のように言う。「初めて古文を学ぶに、急に好しきを求むべからず。力を用いて誦読揣摩すれば、当に好しき日有るべし。」「只ら手に信せて溲泊すれば、天機相い触るるに似たり。然れども工苦積むこと久しきに非ざれば、妄りに希うべからず。」「与門人顔融」文集第七卷）これに対し、「文章に拘らふうちはよき文は作り出でかたけん 文章を忘れて筆に任せて溲泊したるときこそ名文も作らるれ されど、功力久を積むにあらねばかゝる境にはいたりかたけん、たゞつとめはけまんには如かず」（「日記」明二・六・二四「落葉のはきよせ 二篇め」と記したのはこの時期の二葉亭であった。両者のえがく相似形は瞭然である。う。ちなみに、「くち葉集」や「落葉のはきよせ」という手記の名称自体、魏叔子の「掃落葉」三首の詩（詩集卷三）を予想させなくもない。）

私の叙述は、どうやら、この「研窮会」を具体的な話へ移してもよさそうな段階に達したようである。遠くは魏叔子に発想源をもち、直接には「浮雲」第三篇のための筆ならしとして準備された「研窮会」はその名を「冷雲社」と称した。「冷雲社申合の条々」という、「二篇め」にある次の五条が、そのありようをふつともよく集約している。

- 一 吾輩三名を以て社を結び毎月一回集會し雜誌一冊を編輯すへき事
- 一 社名は熟議の上にて定むべしと仮りに冷雲社と名づく
- 一 集會の場所は三名の宅を輪番に充つへき事
- 一 雜誌は各欄を分担すと雖ともそれは只主筆のものを定むるのみにて各々領分を犯さぬとにハあらず、要は書けるだけ書くへきなり
- 一 一冊を分ちて論説小説詞藻の三欄とす、論説欄内には政治宗教社会の事を論ずるもよし 只批評的、文学的の見地なるを要するのみ、詞藻に詩も歌も文も掲ぐべし

右の五条は、社員は「三名」をもって組織すること、結社の目的は「毎月一回

集會し雜誌一冊を編輯する」にあること、の二点に区分して考えるのが便利だろう。以下、その二点をめぐること、で、「冷雲社」の実態をなぞってゆくこととする。

まず、「冷雲社」の社員数を、あえて「三名」に限定しなければならなかった理由は奈辺にあったか。考えられる理由の一つに、魏叔子との縁を挙げることは許されないだろうか。

明末清初、諸生を棄てて翠微峰の山中にこもった魏叔子は、その易堂で古文を講じつつ、八人の同志と学問の切磋琢磨につとめること二十年に及んだという。いわゆる易堂九子だが、その中心は、魏叔子と、兄の伯子および弟の季子との三兄弟であった（魏季子「先叔兄紀略」文集卷一五）。彼らが、江西省寧都県出身のゆえをもって寧都の三魏と呼ばれ、かつその著作も、三兄弟およびその子らの文集を合せて『寧都三魏全集』（林時益編）と称されていたとすれば、「一時全くそれに傾倒して了った」（「文談五則」明四〇・一〇）二葉亭が、その呼称をまったく意識しなかったというのも不自然な話だろう（ただし、現在までのところ、二葉亭の拠った魏叔子が、その『寧都三魏全集』版なのか、それともわが国における復刻版なのか、を特定することはできていない。したがって、かりに二葉亭の用いたものが和刻本類だったとしても、彼が、三魏氏に伝わる、右のような事蹟と完全に没交渉だったこともあるまいと、ゆるく、いわば大目に考えておかざるをえない。）

ところで、寧都の三魏と二葉亭の「三名」とを、いわば連想の糸で結ぶことが許されるとするならば、「冷雲社」を鼎立させていた「三名」とは具体的に誰々を意味したか。どうやら、それは、△長谷川辰之助△、△二葉亭四迷△、△冷々亭杏雨△の「三名」である可能性がつよい。事実、その「三名」を推測するため、些少のうらづけもないではないのである。

○沙弥から長老にハなれぬといふ世の譬の如く何事もつとめずてハ仕遂げかたかり（中略）かくいふはその心元なき一人なる長谷川の辰之介

〔冷雲社設立旨意書〕「二篇め」

○「四迷生汝（に大なる疵有り）の書きし小説」浮雲にハ愚「無学」にして学

〔智〕者ふらんと「する癖」せし痕迹有り 甚だみにくし、（後略）

友人冷々亭主人述

〔くち葉集 ひとかごめ〕

改めて断わるまでもなく、「三名」はそれぞれ彼の本名であり戯号である。しかし、「その心元なき一人」、あるいは「汝」や「友人」、といったいわれの中には、同時に、おのおの独立して活躍していた、「三名」の文学者の存在が暗示されていると予感されぬでもない。

まず、本名としての八長谷川辰之助は、その手記中に、魏叔子ばりに漢文の試作をものした「水天逸事」の筆者「張州逸民長某」（「ひとかごめ」）を名のり、「題眞氏写真」の筆者「日本書生長某」（「二籠め」を自称するといったかたちで登場する人であった。一方、公けの席でも、二十年代初頭に限ってのみ、次のような文稿をものした筆者であることを想起しておかねばならないだろう。

明21・12・19 「『アリストテリ』悲壮体院劇論解説」（『日本演劇矯風会雑誌』第一号）

明22・3 「FRIENDSHIP」（『国民英学会英文集』第一号）

明22・4・12 「文学の本色及び平民と文学との関係」（『国民之友』第四七号）

明22・5・2 「文学の本色及び平民と文学との関係」（『国民之友』第四九号）

明25・3・20 「『アリストテリ』悲壮体院劇論解説」（『歌舞伎新報』一四四一—一三六二号）

二人めの八二葉亭四迷は、『新浮雲』第一篇の「浮雲はしがき」に登場して以来、生涯、その通り名として健在だったのはいうまでもない。

明20・6・20 「新浮雲」（金港堂）

明21・2・12 「新浮雲第二篇」（金港堂）

明21・4・6 「學術と美術との差別」（『国民之友』第二九号）

明21・7・6 「あいびき」（『国民之友』第二五号）

明21・8・3 「あひびき」（『国民之友』第二七号）

明21・10・21 「めぐりあひ」（『都の花』創刊号、第三十六号）

明22・7・21 「浮雲 第三篇」（『都の花』第一八—二二号）

（以下略）

また、八冷々亭杏雨も、この時期、決して右の二者におとらぬ活躍ぶりをみせ

た人である。「くち葉集 ひとかごめ」を始めるに当って、「さてもうとましの我心やと書かぬ先からまづ愛想を尽かしてあきッぱいの杏雨冷々亭の南窓の下にします」（明二一・八・七）という序文を書いたのは他ならぬ彼である。美妙の作品に付された挿絵が物議をかもし、おもむろに「杏雨生論じて曰く」と「裸蝸蝶図論」（「二籠め」明二二・一・二前後）を掲げたのも彼だった。むろん、公表される意図のない手記の中へ埋没して終るような人物ではなかった。すなわち、八冷々亭杏雨は、八二葉亭四迷が人口に膾炙する以前のところで、以下のごとき署名作品を公けにしていたのである。

明19・4・10 「ツルゲエネフ『父と子』（通俗虚無党形氣）春廻家醜助訳冷々亭杏雨訳予告文」

明19・5・10 「カートコフ氏美術俗解」

明19・6・25 「カートコフ氏美術俗解」

明19・10 「女丈夫伝叙」

明20・5 「女丈夫交際之女王序」

こうして、「冷雲社」の三社員を点検してゆくとき、「三名」ともども、いかに健筆の士たるかが彷彿する。「冷雲社」繁盛の図である。

したがって、これだけ活況を呈した「冷雲社」内に、社員だけが囂塞していたと想像するのは何とも片手落ちである。時として、彼らの「友人」が社内を訪問するといったことも当然考えておかねばなるまい。

「与友人勸学書」（「ひとかごめ」）「与友人」 「簡友人」（以上「二籠め」）と題された漢文試作中に見える「友人」、「したしき」ともとのものとへ送らんとする文のしたしがき「梅の枝にゆひつけて人の許にやりたる消息文」「物おもふ人の心をおしはかりて」（以上「二籠め」）などと題されている書簡の送り主が、その架空の「友人」であるに相違ない。現実界の誰彼を意味するのではおそらくなかっただろう。事実、来客のあつたらしい形跡もたしかにあるのである。「客冷雲に問ふて曰く嗜好に標準有りや 答えて曰く道ひ難し、（後略）」

（嗜好論「二籠め」）「したしうゆきかふ友とち三四人とふらひ来てやすくにのみやしろの梅さき出しとそ聞く いてやゆきてむかしの人の袖の香を、ハなつかししぬはん そこもゆきねとそのかされてもともにかわたのいほをいつ、

（後略）」（「二籠め」）

さらには、仮構を紡ぎだす孤独な管為が、ついに空想上の人物を殺すようなことがあってもおどろくには当たらない。「余の親しうしたる友の近頃身羅りたるは

とに涙と共にその遺稿など取まとめんとしたるに文庫の底に細字にてこま／＼と書きつめたるものあり 取り出して読むに自作の小説なり、(中略) 遂に副読氏をかたらひて桜木に香はすことゝなりぬ、原本には表題なきゆるかりに去年の蝙蝠と名づく(「去年の蝙蝠口上」「ひとかごめ」)

二葉亭のひそみにならつてか、それを叙すべき秃筆の方が飛翔しすぎてきたようだ。現実へ戻ろう。

例えば、二葉亭におとしている魏叔子の影の、もっとも鮮明な跡をたどるとき、「魏叔子文集外編」全二十二巻のうち、第六巻「書」所収の「与諸子世傑論文書」「答施愚山侍読書」、第七巻「手簡」所収の「与門人王慈融(簡)」「与揚友石」、第八巻「叙」所収の「宋子癸文集序」「八大家文鈔選序」などの、友人・知人・門人あての諸文がその藍本として注目されてくる。とすれば、こういうところでも、架空の知友を求めようとした誘因はあったのかも知れない。現実の二葉亭が、「浮雲第十九回をかきこちらし」ている前後で、「予は今甚た窮せりといへどもこれまでの如く敢て人に告げて憂を分たんとはせず」、「実に告て憂を分つべき友の寡なきにも由れるなり」(以上「二籠め」)と記すとき、架空に人を求めねばやまなかつた孤独な、しかしなかなか意固地な彼の痼疾がそこに透視されてくるからである。

では、次に、結社の目標として掲げられている雑誌「編輯」の問題に話を移してみよう。なるほど、文章修練が「編輯」のことに収斂されてゆくのは一種の自然であろう。だが、それに拍車をかけ牽引していった力の一つとして、例の、「文学研究会」の首唱者でもあった徳富蘇峰の『国民之友』の存在を置いて考えみることはできないか。

この場合も、「編輯」すべき雑誌はあくまで架空の世界にある。それも、一方では「走書の編輯はまだはやし」(「二籠め」)と自重しながら、しかし他方では、「さてこのころまみえ奉りつる時なん雑誌発行のことをうち聞え奉りつるかそれにつきていさゝか申あはしおきたき事の待るからちとのいとまあるをりもあらバおのれかいをまへ御車をきしらせ給はらばいかうれしかるへきや」(「したきしともちのものもへ送らんとする文のしたがき」(「二籠め」)と進捗もさせてみたかつたような、いわばたゆたいたゆたいたの中で願われていたものとおぼしい。

むしろ、この種のためたたいは、「浮雲」第三篇の文体を模索中の、二葉亭自身の現身の姿の反映と考えてよい。

人生二十になればそれ／＼自活の道を求むべきものなるを(中略) 尚ほいまに確かなる營業の道なく徒らに昔の拙き「まゝにて」を守りて見優るほともの事もえ仕出ぬそうたてきや、さるからに一寸の虫にも五分のたましひは有りて、いかで此まゝに老朽へきと心を振りおこして今茲に社を結び月々文題を課して各々おもひ／＼に作りそをもちつとひ、かたみによしあしをあげつらひなとして作文の業をすゝめんとす(「冷雲社設立旨意書」「二籠め」)

だから、「冷雲文稿跋」という跋語が試作されたからといって、「『冷雲文稿』という文集があったわけではあるまい。強いて言えば、この『落葉のはきよせ 二籠め』自体がそれにあたるか。」(『落葉のはきよせ』複製版十川信介別冊「註」、昭五一・三、日本近代文学館)というべきである。さらにいえば、「二籠め」に先だつ「くち葉集」もまたそれに相当するとみるべきだろう。「物書くことおほえてより二十年 筆ならしのためにとて屢々白紙を綴り合せたること有りたれどいづもながらの三日坊主末まで書きとほしたることハ一度もなかりし」(「ひとかごめ」明二一・八・七)と、幾分自嘲ぎみの序文を記した人杏雨Vとは、そのまま現身の二葉亭の一身にほかならぬからである。つまり、付会を恐れずにいえば、今日残されている「くち葉集」や「落葉のはきよせ」という手記自体が、結果的には「冷雲社」の企んだ「雑誌」や「冷雲文稿」などと並ぶ、その一交種になるわけだ。少なくとも、いろいろにありえただろう「編輯」物のうちの一类に数えてみてもよいのではないか。

それはとにかく、「冷雲社申合の条々」にある「毎月一回集會し雑誌一冊を編輯す」といい、「一冊を分ちて論説小説詞藻の三欄とす」といい、この雑誌の印象には、明らかに『国民之友』を予測させるに充分なものがある。

『国民之友』の表紙にいう、「毎月一回発兌」(明二〇・二一・二〇・九、ただし以降は「毎月二回」)、政治社会経済及文学之評論(明二〇・二一・三一・八)。また、その社告「国民之友」にいう、「国民之友ハ主トシ我邦政治、社会、経済及文学上ノ現象ヲ論評シ併セテ泰西諸國ノ現象ニ及ホスモノナリ(中略) 国民之友ハ毎月一回十五日ヲ以テ発刊ス」(明二〇・二一・八)。少なくとも、目錄に並ぶ「国民之友」「特別寄書」「藻塩草」「雑録」「投書」「批評」「時事」等の欄を「三欄」に集約すれば、「冷雲社」の志向する雑誌の面影はほぼ成立するはずである。

たしかに、二葉亭が『国民之友』を愛読していた事実は枚挙にいとまもないほどである。しかし、同誌から受けた具体的な反応ということになれば徴すべき手

がかりは少ない。「幼稚な」「社会主義」にかぶれて退学した外語時代前後を回顧し、「徳富氏が、平民主義で『国民の友』を出した時などは、フ、ウ、世間にも我輩の様な思想をもつたものが案外居ると見える哩位で、あれ等に啓発されやうなどは、ちよつとも思はなかつた。」「余の思想史」明四一・四」と直截に語つたのを唯一の例に数えうるばかりである。二葉亭にとって、蘇峰とは何でありえたか。対蘇峰への姿勢を、もう少し具体的な場で吟味することが要請されるゆえんである。

共感をもって牽引されつつ、しかし、その肌合いの異質性ゆえに離れざるをえなかつた顛末を、例えば「二葉亭四迷の一生」の著者は次のように説明する。

熱烈なる天才肌の二葉亭と冷静なる政治家気質の蘇峰と相契合するには余りに距離があり過ぎたから、応酬接見数回を重ねた後はイツとなく疎遠となつて了つた。(内田魯庵『思ひ出す人々』大一一・六)

それが、「気質」上の差に帰せられるかどうかはしばらく保留する。が、結果的にみれば、交渉の途上に、越えがたいみぞの意識されていた跡は蘇峰側の回想に明らかである。「初は非常に私共になつた訳ではなく、かく趣味と傾向とが違つた結果でありませう。」(塩田良平記「明治文学余韻——蘇峰氏と一問一答録——」『国語と国文学』昭九・八)

とすれば、これを、二葉亭側に即して考えても同様になるのだろうか。牽引と背反との交錯の跡は、二葉亭側の、「数回」にわたる「応酬接見」の中にもたどられるようである。

その一つは、周知の、二葉亭側からする最初の蘇峰訪問の反応の中にすでに看取される。時に二十年八月二十三日、第一回「文学研究会」(明二一・九・八)の招集にさかのぼることほぼ一年前のことだった。

この訪問の趣意は、「先生を頼みて師とし兄とし學術文芸殊に我日本國勢觀察の指南車と仰ぎ可申と決心致せし義有之候」(明二〇・八・二三)という、当日携えていった手簡に明らかである。それも、当面は、「国民之友」も含む蘇峰の著述への、二葉亭の疑念をただそうとするところに直接の目的があった。

固より先生の議論と先生の感想とは貴著新日本之青年将来之日本並に国民の友等を拝読すれば稍其一斑を窺ふを得べしとは云へ此等の高著は我三千八百万之兄弟の爲に著述被成候ものにて小生一人の爲めに著述相成候ものには不

可有之隨て我時幣を救済する点に於て間然する所之有間敷候へども小生の痼疾を医するに於ては少しく不足に思ふ処なきにあらざる依て失敬をも顧みず唐突を顧みず直々御面晤を願ひ大に胸襟を開きて滿腔の疑ひをたゞし(同上)しかし、「滿腔の疑ひ」をただすべく、「人生問題など云ふ面倒なこと」

(蘇峰「追懐一片」明四二・八)「哲学の話」(蘇峰「明治中期文壇雜話——坪内逍遙先生を中心とせる——」大一一・五)を正面きつてもちだす二葉亭に対し、蘇峰は「生ハ未だ深く尊台ヲ知らず、(中略)尊台願くは自愛せよ」(二葉亭あて蘇峰書簡、明二〇・八・二四)というかたちの、よそよそしい応接を返したばかりだった。いわば、ていどのいい拒否をにぎらされた二葉亭が、おり返しの手紙で「小生は私に恐る先生の或は小生を見損ひたる」(明二〇・八・二五)失望を綴らざるをえなかつたのも不思議ではない。

その二つめには、二葉亭の民友社入社希望のことも挙げられよう。時は、蘇峰訪問の直後、あるいはそれに前後する時点である。

二葉亭側に、どういう思いがあつて入社を希望したかは不明である。その動機の中には、もしかすると、『国民之友』の有力な寄稿者・森田思軒への思いが媒介の契機として動いていたのかも知れない。二葉亭は、思軒の文章を「嗚呼三千八百万人中文人と稱して媿かしからぬ者ハ只此思軒居士森田文三君ノミ」(「国民之友」初刊附録の小説を評す)「二籠め」とまで賞揚する人であった。さらに、その日時を確かめることはできないが、二十年中には蘇峰を介して彼と会見することもあった。「予は長谷川君に対して敬服したることを森田思軒君に告げ、思軒君を紹介せんが爲めに、三人予の宅に会談したることを覚えて居る。併し如何なることを会談したるかは、想起する端緒さへも今は失うて居る。」(蘇峰「追懐一片」明四二・八)

委細はともかく、蘇峰によって、彼の入社希望があつさり拒否された結果だけが、魯庵の二葉亭あて書簡に残されている。

拜啓 昨朝徳富を訪問しとくと協議致し候処 目下社員充滿寸毫の余地をとゞめされ共 長谷川氏の事為れば都合十分に取計ふても見るべし 勿論入社は幸來なれば熱誠を以て歓迎するに踴躍せざれども 唯社の總理阿部充家に計らざれば確答するを得ずとの事なりき 然るに唯今徳富より來書あり 云々長谷川の事因より欲する所 種々協議したり 憾らくは社中満員とても昨今融通の附け様なし云々尚徳富は昨日面会のせつとも 我社微力にして長谷川氏の如き 有為の人材が來つて投せんとする好意に酬ゆる能はざるは 千万

の遺憾なりと十分の辞を尽して申居候（明二〇・八・二八、『早稲田大学』二葉亭四迷資料』所収）

三つめに、蘇峰の「浮雲」観に対する、二葉亭側の思いを付度しておきたい。二葉亭は、後年の談話筆記「余が言文一致の由来」で、俗語本位で進もうとした「浮雲」の方針を抑制するものとして蘇峰の発言を録している。

自分には元來文章の素養がないから、動もすれば俗になる、突拍子もねえことを云やあがることになる。坪内先生は、もう少し上品にしくちやいけぬといふ。徳富さんは（其の頃『国民之友』に書いたことがあったから）文章にした方がよいと云ふけれども、自分は両先輩の説に不服であった、と云ふのは（中略）日本語にならぬ漢語は、すべて使はないといふのが自分の規則であった。（明三九・五）

けれども、二葉亭の「不服」は、ただ文体の問題だけであつたのではなく、その根はもう少し深くかつ広いところにまで及んでいたようである。

「浮雲」のなりゆきに関して、もともと『国民之友』はかなり注意深い眼を注いできた。まず、第一篇（明二〇・六）に対しては、「新刊小説欄子が「浮雲」は所謂浮世噺の小説なり」（第七号、明二〇・八・一五、『浮雲』原文）と述べ、次いで、第二篇（明二一・二）が上梓されるや、「大江逸」を名の蘇峰が次のように述べたのだった。

元來此の小説たるや、面白くもなく、可笑しくもなく、雄大なる事もなく、美妙なる事もなく、言はゞつまらぬ世話小説なれとも、斯のつまらぬ題に依つて、人を怒殺、恨殺、驚殺、悩殺せしむるハ、天晴れなる著者の伎倆と謂ハざる可からず、」（『浮雲』二篇）の漫評」第一六号、明二一・二・一七、『浮雲』原文）

「吾人が嘗て前編出版の日に於て略評したることある如く」と明示されているとおり、右の二文がともに蘇峰その人の「浮雲」批評たること瞭然である。蘇峰はいわば、前者の「略評」を、かなり立ち入った後者の論評によって補填しようとしたのである。もちろん、そのことが、人の気持ちを逆撫でする結果になろうと評者の問うところではない。

しかし、「浮雲」第三篇を『都の花』に連載しようとしていた「二葉亭四迷」の中で、それが些少の波立ちを起させたことは疑えないところだ。

固と此小説はつまらぬ事を種に作つたものゆゑ、人物も事案も皆つまらぬもののみでせうが、それは作者も承知の事です。（政行）『浮雲』原文）

事にはつまらぬといふ面白味があるやうに思はれたからそれで筆を執つてみたりです。（『浮雲』第三篇）明二一・七・七、『浮雲』原文）

なるほど、作者に、こうした居直りに近い姿勢をとらせたのはすべて蘇峰一人の責任ではあるまい。例えば、「浮雲」の筆が瑣末主義に陥りがちな点を衝いて、「非常につまらぬ事案をつまらぬ筆で書いたので蛇足どころか有つて却つて不快を増す物です。」（『いらつめ』明二一・六・一五、『浮雲』原文）と述べたのは山田美妙とおぼしき論者だつた。だから、二葉亭の申し開きは、その蘇峰をも美妙をも含む同時代評一般の、「浮雲」の文明批評的側面を等閑視していた見方そのものに向けられていた、と一応は考えるべきだろう。

表向きはそのとおりかも知れぬ。だが、あれだけ「つまらぬ」をくりかえして逆用してみせた二葉亭の気持がそれですむはずではないか。聞きすてにはしかねることばを聞いたのである。

第一回訪問のとき、月並みにもその「伎倆」を賞揚して答えた蘇峰へ、二葉亭が書き送った口吻を想起してみよう——「伎倆とは何ぞ小説の伎倆に候や若し果して然らば何を標準として御判断被成候や万一浮雲なれば小生また何をか言はむ唯肩をすくめて手を啓く有らんのみ」（明二〇・八・一五、蘇峰あて書簡）。二葉亭が、かりに「大江逸」を蘇峰と知らなかつたとしても、その批評を瞥見しながら、一年前の相手のことばをにがにがしく思い出していたこともありえぬことではなさそうだ。

とすれば、「文学の本色及び平民と文学との関係」を、当の『国民之友』（明二二・四・一二、五・二）に訳載したことの意味も納得されてくるのである。

誌面を提供する側では、最初の訪問を冷たくあしらひ、民友社への入社希望をすげなく断つたことへの見返りという気持が働いたか知れない。少なくとも、「若し学問上の交際を訂結する〔を〕得は露国文学の穿鑿若しくは露籍の翻訳等は貴意のまに／＼可致候」（明二〇・八・二三、蘇峰あて書簡）という申し出を尊重しない理由はない。

だから、答える側でも、まず、「平民」という用語をもつてあいさつした。ドプロリュエボフの原題は「人、民、性」はロシア文学の発達にどの程度関与したかであるという。訳者の序文における紹介文は、「平民主義は露国文学の発達に与りて何程の力ありしや」であり、その表題は「文学の本色及び平民と文学との関係」（以上、『浮雲』原文）である。あえてこのように「意識」したのは、「若し此中に我邦の時弊に適切な議論がありはすまいかと思つたからです」という訳者の意

図による。

「我邦の時弊」に、蘇峰のような批評眼も含まれる可能性についてはすでに前
言がある。

二葉亭にとっては、階級観に立つ文学のナロードノスチより、文学がいかに
「時勢」を反映しうるものであるかということの方がはるか興味があり、し
たがってそれを強調することによって、「つまらぬ世話小説」という評に対
して自己の文学の主意が那邊にあるかを知らしめることが主にならぬであつ
たであろう。(大塚達也「二葉亭におけるドロリーニューボフ翻訳の意味—
その『文学放棄』の起点として—」『国語国文研究』昭四四・六)

通りのいいことばをもって与えられた誌面をかざり、暗に逆襲に応じたのであ
る。それがいい過ぎなら、二葉亭はここに、相手の蒙を啓く気概もこめたのであ
り、少なくともおのれの流儀を開陳してみせたのである。だから、手のこんだ、
こういう方法に無関心の相手が、たとえ「予と二葉亭とは、余りに物事の考へ方
が隔絶して、機縁相契る訳には参らなかつた。」(「思ひ出す人々」を読む「大
四・八」という顔つきをしようとも問うところではなかつたであろう。

こうして、二葉亭を主軸に蘇峰への応接ぶりを通覧してみると、共感よりは
違和、牽引よりも背反の跡の歴然たる事が判明してくる。むろん、当初は親近
の情をもって接しようとしたはずだが、二葉亭の手に残されてゆくものはすべて
負の印象以外にはなかつたことになる。

だから、ここで、その蘇峰を中心に招集された文学研究会の時点にたちもどつ
て再点検するのはあるいはもはや無意味のことに属するかも知れない。

招待状の舞いこんだのは二十一年九月初旬である。この時点で、二葉亭の印象
に刻印されていたのは、一年前の八月下旬の、あの不毛に終つた会見と、民友社
への入社拒否とであつたに相違ない。また、「浮雲」第三篇を構想中の作者に、
蘇峰の「浮雲」観に対するいらだちがわかまっていたと思つたが、蘇峰への
自然だろう。そして、いわば、一種の混沌としてあるこうした思いが、蘇峰への
負の印象に収斂されてきたとき、その負の印象を発条として「冷雲社」の像が結
ばれてくる——「研究会」への不参の理由「思ふよし」には、二葉亭内面のこう
した思いが発酵しつつあつたのではないか。

蘇峰たちが「文学篤志のもの相集つて文学会を組織しやう」(美妙「明治文壇
叢話」)としたのに比べ、二葉亭は「吾輩三名を以て社を結び毎月一回集會し」

(「冷雲社申合の条々」) ようとしていたのである。蘇峰の眼が、外側の現実界
をにらんで文学界を収束しようとしたのに、二葉亭は、おのれの内面に仮構の城
を結ぼうと努めていたのである。

こでもう一つ、こうした推測を支えるべきものとして、二葉亭内部の、全体よ
りは個へ、全体の中の個、に執着する性向のしるはれる資料にも触れておきたい。

○此等の高著は我三千八百万之兄弟の為に著述被成候ものにて小生一人の為め
に著述相成候ものには不可有之(明二〇・八・二三書簡)

○新日本の青年は新日本の為めの著作なれば小生一人の為めには尚ほ不満足
の点なき能はず尚ほ疑はしき所なきにあらず(右同)

ともに蘇峰にあてた自己解剖のことばである。前者の直後で、こういう性向
を、二葉亭はおのれの「痼疾」に求めているのが注意されねばなるまい。「隨て
我時幣を救済する点に於て間然する所有之間敷候へども小生の痼疾を医するに於
ては少しく不足に思ふ処なきにあらず」

こうした発想の源には、おそらく朱子学に依拠した、例の魏叔子の考え方があ
つたかも知れぬ。「天下の事理は日に出て窮まらず。識庸衆より高からざれば、
事理天下国家の故に關係するに足らず。」(「宋子論文集序」文集第八
卷)個人の「識」を人事百般に應じて鍊磨することで天下有用のものとなすこと
が願われているのである。そして、これが、以後の二葉亭へ貫流していたことは
次の諸例が物語っている。

○詭万巻無一字 是(中略) 三千八百万人中 誰可与道者、只吾子可耳(「与
友人」「二籠め」)

○酒乎酒乎、胸中壘塊、由爾以澆、雖然非酒能澆、吾能由酒而澆耳、然則酒力
於吾何有、烏呼天下能飲酒者、只吾一人、冷雲居士識(「題酒樽」「二籠め」)

○一枝の筆を執りて國民の氣質風俗志向を写し國家の大勢を描きたる人間の
生況を形容して學者も道德家も眼のとどかぬ所に於て真理を探り出し以て自
ら安心を求めかねて衆人の世渡の助ともならば豈可ならずや(「日記」明二
二・六・二四、「二籠め」)

こうして、全体と個、全体の中の個、そして全体よりはおのれの個にこだわる
「痼疾」を二葉亭はいやすべくもなかつたのだろう。耳をそばだてれば、ことに
よると、蘇峰ごときの存在を許すことはできるが、それを許すおのれは許すこと
ができない、といったふうのつぶやきも聞えたか知れない。

ともかく、わが「痼疾」に殉じて「冷雲社」を仮設した二葉亭は、いまそのこ

とにかまけて「明治最先の文士会」(逍遙)のことも余人事と考えていたに相違あるまい。したがって、こうした「冷雲社」の瓦解しないかぎりは、まもなくとりにがすことになる「浮雲」の暗いゆくえなど夢想だにしないはずである。

(1) 野々垣利明「明治の八瀉疾」(I)には、このことに触れて「(この理由はわたしにはわからない)。(『試行』昭五二・二)とある。

(2) 複製版『落葉のはきよせ』別冊「解題」の十川信介氏による「註」(昭五一・三)には、志賀重昂、菅丁徳の名も不参者として挙げられている。

(3) 冒頭に「国民之友」第三十七号(明二二・一・一)に関する記事があり、末尾に矢崎嵯峨の屋の「流転」(「国民之友」第五八号、明二二・八・二)のことに關する記事がある。

(4) この手記の序文の日付は「明治二十一年八月七日」である。

(5) 「与諸子世傑論文書」「答施愚山侍讀書」(以上魏叔子文集第六卷)、「宋子英文集序」「八大家文鈔選序」(以上同文集第八卷)。

(6) ただし、これは連想を棄しませる以上を出ない。なお、末広鉄腸に「落葉の掃き寄せ」という時事小説のあることが「国民之友」雑録欄に録されていた(第三号、明二〇・四・一五)。また、同誌の「批評」欄に、東西南北生の「落葉のはきよせ」が連載されるのは第三百十号(明二九・八・二二)以降である。

(7) 柳田泉「二葉亭とその周囲——『浮雲』前後——」には、「どうもこれは、或は二葉亭が当時の流行に感ずるか何かして、半ば真面目、半ば戯れに、自分でもかういふ結社を考へてみたのではあるまいか。さうすると、この三人を現在の友人とか知己とかにきめてしまふのは野暮な話で、これはもう少し洒落れた分子が入つてゐたらう。即ち、長谷川辰之助、冷々亭杏雨、二葉亭四迷この三人が、とりも直さず冷雲社の社員であつたのであらう。」(『文学』昭三二・二)とあり、関良一氏もその立場をとる(「二葉亭筆名考」『専修国文』昭四七・二)。一方、清水茂氏は「明治二十二年初頭から春にかけて、二葉亭は、かなり嵯峨の屋と親近し、互に往來していた。かれは、おそらく嵯峨の屋をそのメンバーの一人として含む三名の同人グループ『冷雲社』を組織して自らその主宰者となり、雑誌を發行しようとしてたりしている。(中略)『冷雲』に問いかける『客』とは、嵯峨の屋、ないしは二葉亭の自意識に投影する嵯峨の屋であつたらうと推断するに足る

だけのものがある。」(「嵯峨の屋おむろと二葉亭四迷(上)——『流転』をめぐって——」『国文学研究』昭四七・一〇)という實在説の立場をとる。

(8) この場合の「冷雲」は、いわば社員代表という趣きである。他に、「題酒樽」の署名例として「冷雲居士」「(二龍め)」というのがある。

(9) 十川信介「註」(前出)には、この人物に觸れて、「不明。『出版月評』などには見当らず、二葉亭の友人で二十一年ごろ死亡した人物も該当者がいないので、仮構の可能性が強い。」とある。

(10) 拙稿「二葉亭四迷における『冷雲社』の発想——魏叔子撰取の側面——」(『日本近代文学』昭五三・一〇)

(11) 前に「十五日」(明二二・七・一五か)の記事があり、直後に「七月二十一日」の記事がある。

(12) まず、二葉亭の訳業「學術と美術との差別」(一九号、明二二・四・六)、「あひゞき」(二五号、二七号)、「文学の本色及び平民と文学との關係」(四七号、四九号、明二二・五・二)の載つた五冊に目を通した可能性は、とも大きいだろう。また、手記等に言及されている記事をもつて推すと、二十八、三十、三十一、三十五の各号、および三十七から四十三の各号にもその蓋然性が高い。四十八、五十八号(明二二・八・二)も同様。つまり、二十一年四月から二十二年八月まで各号は大略継続して見ていたことが予想できる。一方、「『国民之友』さえも、吾に寄贈する代りに、其の先輩古川常一郎に向て、寄贈せしめた。」(「『思ひ出す人々』を読む」という蘇峰のことは、『寄贈』にあずかっていたことも想像される。

(13) 杉井六郎「徳富蘇峰の研究」(昭五二・七)には、二葉亭全集所収の「八月二十三日」書簡(番号四)の日付について、「現在残されている徳富宛の書簡は、ただ『月曜日』とのみ封筒の裏書きが記されているが、二葉亭のもう一通の徳富宛の書簡(明治二十年八月二十五日投函、二十六日付消印)から、明治二十年八月二十二日付と知られる。」との訂正がある。

たしかに、八月二十二日はこの週の「月曜日」である。しかし、二葉亭のはじめて赤坂複坂町の蘇峰宅を訪ねた日が、右でいう「もう一通の書簡」にある「一昨夜」、あるいは、蘇峰が「八月廿四日」付書簡で「昨夜ハ御來臨相成候得共」と述べた「昨夜」(『早稲田大学図書館蔵『二葉亭四迷資料』に相当する「八月二十三日」であったことは動くまい。

全集の「二十三日」説は、おそらく、蘇峰が「此の書簡は、唯だ封紙の月

曜日と記しあるのみであるけれども、次回の来書より考ふれば多分八月二十三日頃であらう。兎も角も始めて君と面会したのは其夜である。」と述べたのに依つたのだらう。「彼れは帰るさに懷中を探つて、一通の書状を残して置いた。それが即ち是れである。」(以上「追懷一片」)と、当日自身で持参したことの断わりがあるからなおさらである。すなわち、この長文の書簡は「二十二日」「月曜日」に認められ、「二十三日」の面会当日に直接手渡されたのであらう。なお、ちなみに、以下、杉井氏による解説を()内へ注記してみた。

(14) 蘇峰の他の回想も大体同様のことを述べている。「長谷川は予に向つてペンを要求したるに、予は石を与へた位のものであらう」(「追懷一片」)「我の語らんとする所は、彼の聴かんとする所ではなく、彼の語らんとする所も、亦た我の聴かんとする所ではなかつた」(「思ひ出す人々」を読む)大八・八)

(15) さらに、これより十年のちの、三十一年一月段階でも同様のことがあつたとおぼしく、「今朝内田より書面到来徳富よりは体よく謝絶せられたる由申越候」(明三・一(日不明) 逍遙あて書簡)とある。なお、同年一月二十一日付内田貢あて書簡参看。

(16) 「今になつて考えると『浮雲』創作の際私が生なまなかぐち中口を出して君の本志に背かせた点があつた、といふのは君の文体に関する初発心は飽くまでも俗語ばかりで綴るにあつた。自然のまゝ有のまゝを現す点から言ふと成程其方が適当でもあつたらう」(逍遙「長谷川君の性格」明四二・八)

(17) 畑有三「二葉亭四迷の『痼疾』」(『専修国文』昭五二・七)参看。なお、同氏の見解は、遠く「二葉亭四迷——『真理』探究と文学者の成立——」(『日本文学』昭四〇・一一)にその原型がある。